

海外とつながり、深化する防災研究

世界の防災科学をつなぐ在外研究員

防災科研では、研究者が半年～1年を目安に海外の大学・研究機関で研究活動を行う「在外研究員派遣制度」を設けています。この制度は、国際的な視野を広げ、新たな知見や技術を取り入れるだけでなく、世界中の研究者と交流する貴重な機会でもあります。帰国後には得られた経験を所内に還元し、防災科研全体の研究力強化にもつながっています。

今号では、この制度を活用してイタリア (CIMA) とニュージーランド (ESNZ) で活躍している二人の研究者の、海外での研究活動や日常、そして今後の展望を紹介します。

CIMAで育む研究力と国際的な視野

極端気象災害研究領域
雪氷防災研究センター 主任研究員
山下 克也

私は 2025年9月から約1年間の予定で、イタリアのCIMA Research Foundation (CIMA / 国際環境モニタリングセンター) にて在外研究を行っています。CIMAは、災害リスク軽減や気候変動適応に関する研究などを行う研究機関であり、防災科研と包括連携協定を結んでいます。

私の在外研究テーマは「気候変動に伴う降水量分布の変化を考慮した水災害や水資源管理に関する研究」です。現在は、日本とイタリアの降雪・積雪の違いや類似性について、観測データを用いた解析を行っています。この解析結果は、将来的な水災害の予測や軽減に向けた研究に生かされる予定です。

CIMA では、研究だけでなく国際研修、技術移転や情報発信も盛んなため、研究者は実用性を重視しつつ多様なプロジェクトに取り組んでいます。そのため、コミュニケーション能力



やプレゼンテーション能力が高く、私の拙い英語でもきちんと内容を把握して議論に応じてくれるので、研究がやりやすく、とても助かっています。

イタリアでの生活は、フランクな人間関係や食文化の豊かさに触れながら充実した日々を送っています。さらなる充実を図るには、もっといろいろな人とのコミュニケーションがとれるように、英語はもちろんイタリア語の言語力向上の必要性を感じています。そこで、語学の勉強を始めました。今後は、研究の進展に加え、CIMAとの連携強化や防災科研の国際貢献を視野に入れて、プロジェクトマネジメント方法等を吸収したいと思っています。

ニュージーランドにおける研究生活

巨大地震災害研究領域
地震津波複合災害研究部門 主任研究員
土肥 裕史

Kia ora* 私は2025年4月から約1年間の予定で、Earth Sciences New Zealand (ESNZ) にて地震・津波の研究を行っています。

ESNZは、地震・津波・火山に関する災害や気象災害、そしてエネルギーなど、地球科学全体を扱う公共研究機関であり、防災科研と包括連携協定を結んでいます。ニュージーランドは、日本と同様にプレート境界上に位置する島国で、巨大地震や津波の発生が懸念されています。私はニュージーランド・台湾との研究交流会への参加をきっかけに海外での研究に興味を持ち、在外研究に応募しました。

私は、沈み込む前の海洋プレート内で発生する地震「アウターライズ地震」について研究しています。一般的にアウターライズ地震は陸から離れた場所で発生しますが、1933年の昭



和三陸地震のように甚大な津波被害をもたらす可能性があるため、将来的な津波の予測や対策は重要な課題といえます。

ニュージーランドでの生活は、住宅の庭や公園に青々とした芝が広がり、川辺や海辺では(リードなしの) 飼い犬が楽しそうに走り回るなど、のびのびとした雰囲気を感じます。また、イギリスの食文化の影響が色濃く残っており、fish & chipsのお店が多く、私もよく利用しています。

今後は、地震・津波のみならず、地震に伴う複合災害の研究を進める予定です。さらに、防災科研とESNZの合同ワークショップの開催などを通じて、連携を一層強めていきます。

* Kia ora : ニュージーランドでよく耳にする、マオリ語の代表的な挨拶